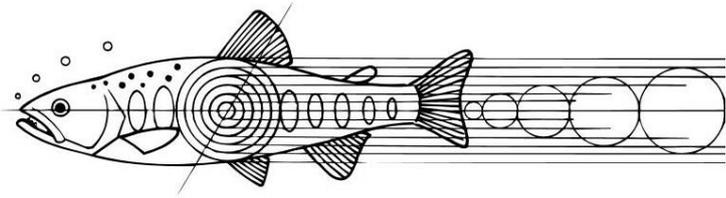


# news

長良川市民学習会ニュース



## 人の営みとともに流れる長良川



美濃市立美濃病院近くの左岸堤防から横越「遊水地」計画地をのぞむ



「遊水地」建設で洪水は、この左岸堤防を直撃する



「遊水地」建設でこの市民の憩いの場（釣り場）は消える



「遊水地」建設で流れはこの一筋に集中させられる

# No.31

2020年2月14日

表紙：横越「遊水地」計画地・・・1  
日本、化石賞受賞：COP25 開催期間中・・・2  
活動報告・・・3  
「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」報告・・・4  
こうやって「遊水地」が消えてゆくのですね・・・12

横越「遊水地」計画について・・・14  
命の川を売りますか？・・・16  
事務局から・・・18  
参加団体紹介・ご参加ください！・・・20

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

## (巻頭言) 日本、化石賞受賞：COP25 開催期間中

長良川市民学習会代表 粕谷 志郎

岐阜市も名古屋市も未だ初雪が観測されていません（執筆 2 月初旬）。1981 年の統計開始以来の記録を更新中とのこと。これからも次々に新記録が生まれる事は間違いありません。地球は有史以来未曾有の温暖化が進んでいます。確かに、10 万年周期の高温期があり、今より高い気温の時期もありましたが、あくまで、自然の周期内の出来事です。今ある温暖化は人為的温室効果ガスの増大によることは科学的に明らかにされています。一昨年、世界で 6,000 点を超える科学的な文献を参考に作成された IPCC 特別報告書「1.5℃の地球温暖化」では、「地球温暖化を 2° C でなく、1.5° C に抑えれば、人間と自然生態系にとって明らかな利益となり、より持続可能で公平な世界を確保することにも資する可能性があります」と述べています。同時に、第 1 作業部会共同議長の翟焱茂（パンマオ・ジャイ）氏は「この報告書から強く感じ取られる重要なメッセージの 1 つとして、私たちがすでに、異常気象の頻発、海水面の上昇、北極海氷の後退といった変化を通じて、1℃（産業革命以来）の地球温暖化の影響を目の当たりにしているということが挙げられます」と語りました。気象の変動がこれ以上破壊的にならないように温室効果ガス削減の「野心の引き上げ」が求められたのが今年の COP25 だったわけです。トランプ氏は温暖化そのものを否定していますし、日本も化石燃料に基礎を置く経済最優先に変わりは無く、「野心」はしばむばかり。NPO 団体による皮肉を込めた「化石賞」なるものを 2 回受賞しました。

温暖化により、台風やハリケーンなどの威力が増す事が予測されています。今年の令和元年 19 号台風は、アメリカのハリケーンのカテゴリーの最大級 5 に相当すると、世界の注目を集めました。国・県管理河川の 140 箇所で堤防が決壊し、97 名の犠牲者を出しています。予測によれば、数は減るとのことですが、スーパー台風が毎年のように襲来するのも想定範囲内としなければならないようです。

かつて伊勢湾台風で自宅が流され、親族を亡くされた経験のある長島町の加藤良雄さんのお宅を見学させていただきましたことがあります。高潮が、伊勢大橋の支柱にぶつかり、その勢いが破堤を引き起こしました。満潮位は地面から 1.2m、被災水位ははるか上の 3.9m、2 階まで水が来る高さです。今は河口堰が少し下流に出来上がっています。13 本の堰柱があり、伊勢大橋の支柱とは数、幅ともに比較になりません。満潮時に重なると、低気圧に吸い上げられた水位ははるかに上昇し、伊勢湾台風の二の舞となりかねません。加藤さんは作業場 2 階に米などの食料品、必需品を備蓄しておられました。1 年分ほどです。長い避難生活を強いられた経験からのことです。自宅 2 階の屋上にはさらに 5m ほどのやぐらが組んであります。個人のレベルでここまでされるのは並々ならぬ事ですが、その地域に即した対応が迫られていることをひしと感ずるのが、昨今の災害の状況です。しかし、もう一つ印象的だったのは、長野県にも別荘があり、最後はそこへ避難するとのことでした。アメリカを襲うスーパーハリケーンの報道では居住区から続々と遠方へ避難する人々の姿がありました。スーパー台風の予想針路を外れて遠隔避難をする。こんなことも現実味を帯びてきます。結果論ですが、19 号台風でそれが出来ていたなら、100 人近い人命は失われなかったと断言できます。



先回のニュース No30 発行（10月24日）以降の活動報告をします。11月9日、愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の主催で県民講座「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」が愛知大学名古屋キャンパスにおいて開催されました。オランダと韓国から講師を招き、河口堰開門をめぐる状況や市民・行政の活動の報告を受けました。「河口堰開門」が世界の流れであると強く感じるとともに、両国の行政と市民の地道な努力と歩みを知ることができ、長良川河口堰の開門をめざす取り組みに大変参考になりました。内容は、次ページからの報告をご覧ください。

昨年末、「木曾川水系河川整備計画」の変更原案が提案されました。長良川河口堰建設反対の全国的な大運動の最大の成果は河川法の改正であるといわれています。改正の柱は、それまでの河川行政の目的である治水、利水に「環境」が加わったことと「住民参加」の仕組みが加わったことです。河川整備計画策定については16条の2でその仕組みがうたわれていますが、実態は法の趣旨とかけ離れたものになっています。

今回の計画変更についても、論議される流域委員会の委員の顔ぶれは国の言い分を丸呑みする常連の先生方のまま。その委員会を市民が傍聴しようとしても直前一週ほど前に突然発表されるホームページでの開催予告に気がつかなければスルーしてしまいます。傍聴できても質問は許されない。パブコメ（意見募集）があったが、ホームページのどこに掲載されているのか、改正される変更箇所はどこなのか比較検討できない無礼な提案の仕方でした。さらに、今回、酷いのはホームページの故障が12日間放置され、パブコメに必要な情報が検索できない状況にあったことです（市民の抗議を受けパブコメ期間は12日間延長となった）。河川法の趣旨を忘れ、市民参加を全く無視した国土交通省の姿勢が続いています。

今回の計画変更案では長良川の「遊水地」整備の提案がありますが、住民に丁寧な説明をする姿勢がないまま行政手続きが進められ、唐突な計画内容となっています（P14参照）。地元住民の不安を置き去りにした計画決定は急ぐべきではありません。

今、長良川では「環境」や「生物多様性」という言葉を忘れたかのように「国土強靱化」の名で河川工事が推進され、世界農業遺産「清流長良川の鮎」を看板に鮎の放流拡大・増産が進められています（P16参照）。長良川の景観や魚の様子

は大きく変貌しようとしています。河川整備計画変更案では、「河道掘削工事等の実施」において、新たに「規制緩和の拡大」「民間が有する力の活用」等が加筆され、この流れに拍車をかけようとしています。

今年は河口堰閉鎖25年、生物多様性COP10から10年となる節目の年です。1月11・12日に名古屋国際会議場で開催された「あいち・なごや生物多様性EXPO」で、よみがえれ長良川実行委員会は、ブースを出展し「河口堰の開門調査実現！」の決意をアピールしました。

また、2月29日には同封しましたチラシのようにシンポジウム「よみがえれ長良川2020」を開催します。最近「岐阜県の魚類」の第二版を発行された向井先生の講演を基調に「変わりゆく長良川のこと魚たちのこと」を市民と一緒に考えます。サツキマス漁師の大橋亮一さんが逝去されて一年が経ちましたが、弟の大橋修さんからシンポの登壇の快諾を受けることができとても励まされました。市民のみなさんの参加を期待しています。



2019/11/29  
服部美濃市会議員の案内で横越  
「遊水地」計画地を視察する長良  
川市民学習会のメンバー

## 県民講座「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」報告

2019年11月9日、愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の主催で県民講座「河口堰開門の世界の先進事例を学ぶ」が愛知大学名古屋キャンパスにおいて開催されました。はじめに検討委員の今本博健先生から参加者が理解しやすいように「先進事例への予備解説」があり、続いてオランダのティアード・ブラウさんから「オランダ西南部のデルタの過去・現在・未来」と韓国の金敬哲さんから「洛東江河口堰の開門と課題」の講演を受けました。「河口堰開門」が世界の流れと強く感じる内容でした。

そのあと講師のお二人に加え愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の今本博健、伊藤達也委員、そして学生の今井洗貴（名城大学農学部・生物環境科学科）さんをパネラーに、コーディネーターを検討委員会小島敏郎座長が務め、会場からの質問も入れながらシンポジウムが行われました。

紙幅の制限から全部は報告できませんので、長良川市民学習会の文責で要約してまとめました。

全体と詳細は、愛知県水資源課ホームページでご覧いただくと幸いです。

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/nagara-kenminkouza.html>

### オランダ西南部のデルタの過去・現在・未来

元ライン川総合開発責任者 ティアード・ブラウ



私は2014年まで、オランダ南西部のデルタ地区のゼーランド州の施策づくりに携わってきました。私は日本に來られてとても幸運です。私たちがと日本とはとても縁

があります。150年前、治水の土木技師として日本で活躍したヨハネス・デ・レーケは私たちが住んでいる地区の近くの出身なんです。

私たちの地域と木曾三川とはとても共通性があります。長良川、木曾川、揖斐川のように私たちの地域でもライン川、マース川、スヘルデ川の三川が流れています。この地域は、1000年ぐらい前までは主にピート（泥炭）や塩性の沼地が広がっていました。1000年ぐらいになると人々は自分たちを守るために堤防を造り農業を始めるようになりました。この地域では巨大な堤防のネットワークが広がっていきま

した。

しかし、1953年に巨大な高潮に襲われ、堤防が決壊し、1800名の死者が出る大惨事となりました。

これを受け、わが国政府は「デルタ計画」（次ページの図）を決定しました。それは、ダム建設により海岸線を700km以上短くするというものでした（アントワープやロッテルダム港の水路となる南北の川にはダムは造りませんでした）。

デルタ計画のダム建設は汽水域を湛水と塩水が完全に分かれた流域に変えてしまいました。その結果、潮の満ち引きなどのダイナミックな河口の動きは完全に消えてしまいました。

#### オランダのデルタ地帯



●ライン川、マース川、スヘルデ川が運ぶ土砂でできた河口の島々を堤防でつなぎ、水を排水して、干拓地(ポルダー)として利用している。

ダムで仕切って巨大な淡水湖としようという計画でしたが 1960 年代になると漁師や環境団体の反対運動が高まりました。カキやムール貝の産地でも有名なオスターズヘルデでは、政府はダム建設を止めてストームサージ・バリア（北海の高潮の時だけ水門を閉じる）方式を決定しました。80 年代になると、グレーベリンゲンは、塩水の生態系価値と湖のレクリエーションの価値を評価してダムで仕切り塩湖として残すことになりました。

デルタ計画は 1997 年に終了し、この段階で結果的に淡水システムとして残ったのはハーリングフリートとボルケラク湖だけとなりました。



こうした経緯といろいろな調査をした結果、明らかになっていったことは、ダイナミックな河口の働きがなくなってくると、生態系に大きな損失が起こってくるということでした。私たちが今やれる唯一のことは、痛んだものを修復していくことです。

淡水湖となったボルケラク湖は大量のアオコが発生しレクリエーションもできない状況にあります。対策として潮の満ち引きを取り戻し、この湖を水源とする農地にはより上流から淡水を導くことです。計画半ばまで達しているのですが「なんで塩の湖にしなければならないか」の反発も多いのです。先ほど現地から連絡がありました。計画決定は延期になったようです。

次に、ストームサージ・バリア方式を取り入れたオスターズヘルデですが、水門の潮の出入りが自然とは違うので周辺の干潟や浅瀬が消え、鳥やアザラシ等の動物の生息に影響を与えています。私たちは、いろいろ試験を重ねた結果、ストームサージゲートの背後の浅瀬に 130 万 m<sup>3</sup> 砂を置くことで対策を立てています。

次は、垂直に水をかき混ぜる試みです。グレーベリンゲンは北海との接続がとて小さかったため潮力が弱くこの湖では層状化が起ってしまい、湖底が無酸素状態になってしまいました。魚や貝も棲めません。そこで唯一の解決策は、北海との接合を新たにつくることでした。無酸素解消はコンピューター・シミュレーションでも証明できました。政府も 7,500 万ユーロの追加予算を出し、潮力発電も試み 2026 年に完成の予定です。



ハーリングフリート河口堰

最後にハーリングフリートです。この水門は長良川河口堰と同じく川から海への片方からの機能しかありません。海水がハーリングフリートに流れ込むことはありません。魚が遡上・降下する際、急激に塩分濃度が変わり、浸透圧ショックで死んでしまいます。

実は、この水門を少しずつ上げ、徐々に川の塩分濃度を変えていき、なんとか魚が北海から川に遡上する、もしくは川に下る状態に戻すのに、なんと 18 年もかかりました。農民や産業界に「上手に操業するので大丈夫！淡水の取水口も上流に移動させるので」と説得するのに時間がかかったのです。取水口の移設に加え、EU 連合の「早く河口の水門を開けて、ライン川の環境を改善せよ」という外圧も政府に追い打ちをかけました。2018 年に「少し水門を開ける」決定をしたのですが、川の水量が少なくて開けられず、水門の一つを「開けたまま」になったのは、結局、今年

(2019) 1月16日でした。

このようにして私たちは、非常に丁寧にゆっくりですけど、魚たちのためにライン川とマース川のドアを海に対して開けようとしているのです。この10年の間、ヨーロッパでは4,000以上ものダムが撤去、もしくは川の流れや生態系を再生するために改修がされてきました。

以下、まとめとして学んだことを述べます。

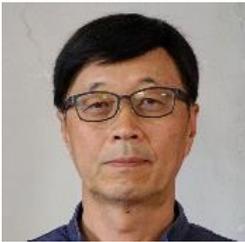
- \*デルタ計画によって失った生態系的損失は、河口のダイナミズムを取り戻せば解決できます。
- \*ただ安全のため、ただ農業用水のためというような単一の分野に焦点を当てる方法ではなく、様々な側面から考える統合的水管理という発想への転換が必要です。
- \*生態系は複雑だということです。このような複雑な生態系システムに対し私たちが介入したら何が起こるか、事前にはいつも分からないのです。

この統合水管理のコンセプトを最初に提唱した人はオランダ人のヘンク・サエージさんです。実は彼は日本にも来たことがあります。その彼の言葉をお伝えし終わります。

「自然は最高のエンジニアだ。だから、自然に手を出そうとする前に、ちゃんと二度考えなさい。」

## ナクトンガン 洛東江河口堰の開門と課題

洛東江河口汽水生態系復元協議会 キム・キョン Chol



みなさんにお会いできてうれしいです。長良川河口堰にはこれまで3回来ました。昨日も現地に行ってきたんですが来れば来るほど、分からなかったことが分かってきて、よかったですと思っています。

私は現在、洛東江河口汽水生態系復元協議会委員に籍をおいています。同時にあとでお話する4大河川事業の再評価をする韓国の環境省、環境部というのですが、この評価委員もつとめております。\*四大河川事業は、16の堰と5.7億m<sup>3</sup>の河道浚渫により、利水と治水に資そうとするもので、李明博(イ・ミョンバク)大統領(2008-2013)が実施しました。

右上の写真は1970年代の洛東江河口の乙淑(ウルスク)島です。島といっても、こちらの輪中のようなところです。長良川と私たちの洛東江は、気候も地形も似ていて、そして、なによりもこの写真のようにシジミ漁が活発でした。こういう共通点があります。

ここに、1980年代に河口堰が造られたわけです。

河口堰を造った目的ですが、釜山市民の飲料水の安定供給と隣の金海市の工業用水の確保です。長良川の近くに三重県の工業団地があるように、釜山の近郊にもあるんです。

飲み水を供給するためには、塩分が入ってはダメですが、実際に年間どれくらい塩分の被害が出てきたかを調べると干ばつときでも「2~3



「日水が取れない」というレベルで、ほとんど水が取れないことはありませんでした。土木とか企業とか、建設の名目上造らなきゃだめだったのでしょう。1983年に着工し、1987年に完成。たった4年で造ってしまいました。堰建設に伴い、飲み水の取水口は25km上流に移動されました。

洛東江河口堰を造ると、様々な問題が起きました。流れが止まり水質の悪化という問題が起きました。

昔、長良川も沢山のシジミが採れたと聞いていますが、洛東江の河口もシジミ漁が大変盛んで、そこで採れたシジミを日本にも輸出していました。シジミ漁やウナギ漁をしていた漁師さんたちが深刻な経済的打撃を受けました。洛東江の河口というのは、韓国で一番重要な保護区域だったんですが、河口堰に付随して道路ができ、開発圧力が加速的に大きくなり、乱開発が始まってしまいました。

そこで、完全に自然が破壊される前に、元来あった汽水域を復活させようという市民たちの声が高くなりました。2012年7月に市民が集まり、洛東江河口堰開門のための「汽水域生態系復元のための協議会」が発足しました。さらに世論を喚起して政治家たちが選挙の公約にこれを掲げるように運動を展開しました。

2015年9月に釜山の市長が洛東江河口堰の開門を公約し世論を高めましたが、洛東江は1級河川なので河口堰を開ける権限はありません。

釜山出身の文在寅大統領は2012年最初の出馬で「河口堰の開門」を公約しましたが当選できませんでした。しかし、その時から専門家チームがいろいろ研究を重ねてきました。2013年には用役（専門家に解決策を問う科学的な策の提示を求める）が出ました。研究チームが2013年からどうすればいいのか動いていたのです。

**1次用役**では、自然環境及び開門時の可能性の点検。今どんな生物がいるのか。どのように生きているのか。もし開門したらどんな影響が出るのかという調査をやりました。そして**2次用役**はモニタリングで、どこまで開門すれば、どの範囲まで水を上げればいいのかというシミュレーションを行いました。**3次用役**では農業、漁業にどのような影響が起こるのか、本当にそれは安全なのか、検証してもらうことになったのです。

**3次用役**の2では、実際に水門を開けてどのような変化が起こるかというモデリングをやっています。

第1次実証試験として今年（2019年）6月6日の夜に水門を開けて、68万tの海水を入れてみました。河口から9.2kmの高くなっているマウンドのところまで塩水が上がってくると思っていたのですが、その通りの結果が出ました。第2次実証試験は9月17日に行いました。今回は101万tの海水を流入させました。今度は地下水に影響が出たかを検証をしました。塩分がどれくらい地下水にしみ込むのかという影響を、井戸を掘って測定をしたのですが、そんなに影響がないという実験結果が出ました。海水を入れた後は透明度が上がり、改善されているのが見て取れました。

農業と工業に対する対策についてお話いたします。今本先生の話に出てきました日本統治時代に造られた農業用水取水口よりもっと上の方に汽水域を復元させようと思うならば、例えば15kmまで汽水域を復活させようとした場合、水門はどれだけ開けて、どこをどうしてという全てをモニタリングしないと、汽水域の復活というのは全て絵に描いた餅になりますので、慎重に進めている次第です。長良川のダブルゲートみたいな方式の水門に改造しなければいけないという問題も提起されてきました。

2020年の末までにこういう試験を順次開門し完了させようと思っています。2025年までに汽水域の復活を完全にやり遂げようと思ったんですが、実際やってみるとですね、そんな簡単なものじゃないので、もうちょっと慎重に時間をかけてやろうと思っています。2020年までにこの試験が終わりますので、試験期間中に



農業や漁業にどのような被害が出るかというのは見えてきますから、漁民と農民に対して、どのような補償が必要か、今後のもっていき方を協議しようと思っています。

最後に、4大河川事業についてお話をしたいと思います。今後、長良川河口堰が開門されて起こる問題に対してどのような組織を作ったら良いのか、どのように事を進めていけば良いのか参考になる事例がたくさんあるのでお話をさせていただき次第です。4大河川事業というのは干ばつ解消や水質改善とか色々なことが、期待されましたけど、始まる前から多分ダメだろうと皆が思っていた事業です。韓国の市民は、造る前から活発に反対運動をしましたが、造った後も、一日でも早く元の自然に戻すという活動を今も継続的に続けています。

韓国の4大河川事業で可動堰ですけど16個ものダムが造られたのです。先ほどブラウ先生の話にも出ましたが、流れが止まるとアオコが生じます。もう魚なんて住めませんね。渡り鳥の渡来地もそのまま放っておくとえらいことになるということで、もう一度自然に戻そうという市民たちの動きが沸き起こり、国が定める事業として、再自然化を採択させようという運動に繋がりました。そして2018年に再評価団という政府の機構ができました。



公務員で構成される組織と専門家と一部の市民で構成される専門委員会が成り立っています。また、各自に水管理とか水利とか社会経済というテーマで小さな委員会を作って討議もします。この委員会が調査して、「じゃあ16個の堰をどうするのだ」ということをこの企画委員会が検討して、上部にあげるのです。15名で構成され、8名が公務員で7名が一般市民です。公務員の8名の中には、国の機関のトップが名前を連ねています。

「じゃあ16個の堰のどれを撤去して、どれを開門して」という基準は、水質、生態、利水、治水、地域の認識、堰の安全性などの評価を定めたと言うことです。ところが、専門家の意見だけを聞くと、一般市民には分かりづらい。そこで経済評価という指標を持ってきて、市民でも分かりやすいように工夫をしたということです。ざっくり言って経済的にどうだというのを分かりやすく示したということだけ分かって下さい。このB/C(費用対効果)が1より大きければ無い方が良いという結論になると。この分かりやすい数値で示したと言うことです。

例えば錦江にあります堰では一部は解体、榮山江では常時開放と解体、こういう結論を導き出したと言うことです。他の2つの堰は撤去ではなく常時開門という結論を出しました。韓国で一番水に対して指導的な立場にあるのは国家水管理委員会です。ここが議決すると錦江と榮山江に対してはこの提案が実施されるということになります。4大河川の内、錦江と榮山江はすぐに出来たのですが、洛東江と漢江は複雑な問題が絡み合っていて、結論を出すのはちょっと難しいです。ちょっと遅れて、2020年の6月～7月くらいになるのではないかなあと今思っているところです。時間がきました。以上です。

## (シンポジウム)

小島座長 お二人の講演を伺い  
わかったことは、開門実施ま  
では時間がかかること、そし



て調査など慎重に進めることが大切だということです。韓国で開門が検討され実施されるまでほぼ7年、長良川の検討会もほぼ同じ頃始まりました。政治的な違いはあるが、自然を大切にしていこうということは党派を超えて大切な課題だと思います。二つの国の経験、特に韓国の経験は我々には貴重な事例となると思います。

**伊藤** 韓国では人々がおかしいと思ったことが政治につながる、行動につながるというのを聞きましたが、私たちはなかなかそうなっていません。河口堰でも問題があっても諦めてしまっていないか、怒りを忘れてしまっていないかと反省しています。

**今本** 最近日本では非常に台風が上陸し水害が出ているが、韓国ではどうですか。洛東江の堰はずっと連なっていますが治水としてうまくいったのかどうか。

**キム** 大きな洪水は山間部ではあったが、平野部ではなかったと言っていいでしょう。付け加えて言うならば、4大河川事業は、洪水を予防する施設であると言うんですけど、実は、誘発している施設ではないかと思っています。

**小島座長** オランダの堰と、長良川の堰の役割は違うが費用対効果の考え方と、川からの洪水はどうですか。

**ブラウ** 川からの洪水はオランダでも90年代に2度深刻な状況がありました。堤防を造ったせいで川の幅が狭まっていました。この10年で、川にもっとスペースを造る、というプロジェクトを始めました。洪水対策だけではなく、自然回復などの目的もありました。結果的にこのプロジェクトはうまくいきました。広がったスペースに家を建てるということだとトラブルになります。スペースの使い方が政策としてとても大切です。1953年の高潮では15m以上になり多くの人が亡くなりました。費用便益の考え方ですが、新しい堤防を造るときには経済的なリスクを入れた標準値を作る新しいシステムを導入しています。人々の生命、生活を守ることと共、多くの人々が住み経済が密集する都会の近くでは経済的な側面も入れて、人口の少ないところより高いレベルの標準値をとということです。

**小島座長** オランダでは、命を守る洪水対策はどうされていますか。

**ブラウ** とにかく一番良い方法は避難です。できるだけ早く、5日以上前から、安全なところへ避難することが一番です。

**今本** オランダには世界的な水理実験所があり、計画力も施工力もすごいんですけど、ドイツやデンマークに比べて環境への関心はやや劣るのでは、と聞いたことがあるがどうなんですか。

**ブラウ** 堅固なダムを造る計画の際、環境に関心のある人たちが大きな反対運動をしてくれました。今は堤防一つ造る時でも、必ず自然の再生とか違う目的も付け加えます。1つの目的だけではなく、機能は2つ3つといろいろ考え、自分達の暮らし、他の生き物とのバランスも考えながらやるようにしています。

**伊藤** ダムやゲートを造り魚が遡上できなくなるとドイツやフランスなど上流の国々からクレームが来たそうですが、どれくらい問題意識があったのですか。

**ブラウ** 1960年代は水質は最悪で川は死んでいました。サケは完全に消えていましたが、70年、80年代に浄化プロジェクトをやり水質は改善されました。しかし当時、川には非常にたくさんのダムなど構造物がありました。せっかく水質が良くなっても魚は遡上できなかったわけです。流域の国が集まってなんとか魚が遡上できる川にしようという試みが始まりましたが、河口のオランダにハーリングフリートがあり遡上できない状態でした。上流、中流が大丈夫なのに河口が閉じているという最低の状況だったのです。ですから私たちはこれをなんとかしようと、サケだけでなく他の種もちゃんと遡上できるよう、しっかりモニターしながら水門を上げようとしているわけです。

**今井** 僕は河口堰の近くに住みほぼ毎日釣りに行っていますが、若い人は水辺で見かけません。僕は魚のこと

を勉強していますが、絶滅が心配なのは水辺の子供ではないかと思っています。オランダでは環境が良くなって、子供達が遊びに来るようになったのでしょうか。

**ブラウ** 水門を上げ潮が入り環境が改善され、近くのロッテルダムの住民達が豊かな自然を楽しむようになり、若い人達にも良い状況になっていると思います。

**キム** 韓国の人は川で泳いだり川辺で食事をしたりするのが好きで、釣りが大ブームです。

**市民** オランダではダムによって砂浜がなくなり、そこに砂を入れたそうだが、それでは根本的な対策にはならないと思うのですが。

**ブラウ** その通りです。本当に今の段階の解決法ですね。実際そのような本来の自然のプロセスがあれば、そんなことはやらなくてもいいわけです。本当に唯一の方法というのが、ストームサージ・バリアー（高波が予測される時だけ水門を閉める）のゲートを取ってしまわなければならないということになります。しかし実際にこれの撤去が選択肢になるには、もうちょっと時間がかかると言うか、待たなければいけないかなと思っています。

**高校生** 日本の学校では生物多様性とかは詳しくは学ばないんですが、韓国での環境教育の現状を教えてください。

**キム** 国から自治体に環境教育をする予算を配置して、自治体だけでなく鳥類、爬虫類などの民間の環境団体などもやっています。親たちが週末に子供たちと一緒にいるんなどを訪ねて、そういう教育と一緒にしたりするのがすごく流行っているんですね。子供の頃に興味を持つように配慮し長期的に教育することが必要だと思います。

**キム（通訳）** 今、韓国では海や川、野原へ行って鳥を見て写真を撮るという探鳥会が大ブームになっています。

**今井** 僕の近くの小学校の先生で環境学習に熱心な方がいらして、僕は総合学習の授業に参加させてもらっています。でも学校の先生方はとても忙しく、年に数回行けたらいい方です。来年（2020年）はCOP10から10周年で愛知目標の目安の年になるので、もう少し現場でも環境教育にも力を入れたらいいなと期待をしています。

**市民** 長良川の下流部ではシジミはほとんど絶滅してしまったが、韓国では復活させるための具体的な方法や計画がありますか。

**キム** 韓国の洛東江でも河口堰ができて2、3年たたずに絶滅の状況になってしまい、昔シジミを採っていた地域は文化財保護区になり採ることもできない状況になっています。シジミはごく少量ですがいるのは確認できています。シジミ復活計画はまだありませんが、時間をかければ元の状況に戻るのではと思っています。採れなくなると他の所で乱獲し絶滅は全てで起きるので、今あるものを少しでも守らなければと思います。

**市民** 河口堰は本当に開けるのかな？と思ってきたが、開けるんじゃないかと、きょうのお話を聞いて心強くなりました。愛知県の検討会議も2011年から始まり、ようやく今年初めて第一歩の川床調査ができました。お二人の講師から助言をいただきたいと思います。

**キム** 時間がかかっても、根本的な問題を見抜いてそこから直さないとダメかなと思います。未来の世代のために、今起きている問題を少しずつ改善する、或いは変わっていくということでは足りないんじゃないかと。未来を考えるのであれば、根本的な問題を解決すべきだと、そういうことを申し上げたいと思います。その方がむしろ解決が早いと。

**ブラウ** ハーリングフリートの経験から考えると、忍耐です。ほんの少し開けるのに20年待ったんです。根

本的なところから変えていくことが重要です。時間と知識、このコンビネーションが重要です。知識が増えれば増えるほど時間は短くなりますよ。皆様方、ご検討を祈っています。

**小島座長** キムさんの言われた「用役」、専門的な知識を積み重ねていくことが我々検討委員会の役割だと思います。ここ数年、国に対話を申し入れているができていません。市民運動とも連携し、国と対話ができるようにしたい。オランダは上流の国々が頑張ったというお話でした。源流の山から伊勢湾に流れる長良川でも岐阜県や三重県へも引き続き呼びかけていきたい。我々も長生きして頑張らねばと思います。

**長良川河口堰への適用：ゲート操作の改善**

検討委員の今本先生は「事前解説」においてオランダ、韓国の治水の歴史と現状の解説をふまえて、長良川河口堰への適用を次のように提案されました。

長良川河口堰でも操作の改善は図られてきました。オーバーフロー方式あるいはアンダーフロー方式により藻類や底層DOへの対策を行っていますが、環境の改善に役立っているとは評価できない状況です。

塩分を遡上させ、水位を変動させるコントロール・タイド方式の導入が必要です。ゲートの操作を、上下流で水位差のある「縦開き」から、水位差のない「横開き」にする必要があります。これにより、汽水域および感潮域の復活が期待されます。

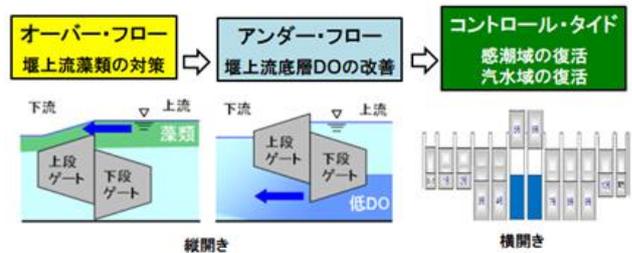
わが国の国交省の役人は優秀です。方向性が示されれば、実現させる能力があります。

長良川河口堰の開門を実現するには既設の利水の代替が必要ですが、それが可能であることは長良川河口堰最適運用検討委員会がすでに示しています。

望むらくは、海外の事例を参考に、新たな長良川方式を開発し、自然環境の復活を目指してほしいと思います。

**長良川河口堰への適用：ゲート操作の改善**

- 水質改善のためのフラッシュ操作が2000年より実施され、一定の効果が挙げられているが、自然環境については破壊されたままのものが多い。
- 抜本的な解決には、感潮域の復活、汽水域の復活が不可欠であり、コントロール・タイド方式についての検討が望まれる。



**ハーリングフリート堰における操作方式の変更**



- 操作方式の検討
  - ・ブローケン・タイド方式：湾内の干満なし(水位一定範囲)
  - ・コントロール・タイド方式：湾内の干満あり
  - ・ストーム・サージ・バリア：高潮時を除き常時開門
- コントロール・タイド方式の採用
  - 1/3のゲートを95%開門 取水口移転
  - ・生態系の再生



長良川河口堰の見学 (11/8) の後、船頭平河川公園にあるデレーケ像を訪れた。  
金敬哲さん (一番左) とブラウさん (右から3人目)

## こうやって遊水地が消えてゆくのですね

NPO法人 ギンブナの会 須田 道康

長良川の中流部、保戸島から始まる関市の西部地区と呼ばれるところには昔から住んでいる人たちに「遊水地」と呼ばれている遊水区域があります。ここは増水した水が最初に入ってくる場所、もしくは入ってきても仕方がないとされてきた場所です。低い土地で、昔の河原又は湿地です。

川（長良川）には広い所と狭い所があります。関市西部地区で武儀川と津保川そして長良川が一本の流れになります。一つになった流れは金華山と百々ヶ峰の間を流れて岐阜市街地へ入っていきます。千鳥橋のあたりは狭い所です。川を流れる水の量はこの狭い部分で決まってくる。

では、増水で流れることができる量以上になったらどうなるのでしょうか？そうです、川から溢れます。川の何処かまわらず溢れたら大変困ります。ですから溢れる所が決まっています。それが遊水地（遊水区域）です。こんな役目を西部地区の遊水地（遊水区域）は果たしてきました。



岐阜県庁正面にある連年災害復興記念碑  
(植え込まれた石は県下全市町村災害地の石)  
「忘れたところにやってくる災害への戒め」と記されている。

昭和 30 年代ごろまでは毎年梅雨時や台風が来るとほぼ常習的に冠水していました。昭和 34 年 9 月の伊勢湾台風、35 年、36 年の第 2 室戸台風と岐阜県は全域で大きな洪水被害を受け（昭和 34・35・36 年連年災害と呼ばれている）、これを機に大規模な河川改修事業がはじまります。

堤防を作ったり（補強したり）川を掘削したりしました。遊水地にも堤防が作られましたが、遊水機能を残すために霞提が設置されました。功を奏して次第に遊水地も浸水することがなくなってきました。



上の写真は千疋大橋を下流側からの撮影したもので、両側は堤防になっています。

左の地図は千疋大橋が架かる以前のもので、右側（左岸）には広大な遊水地（遊水区域）が広がり、用水（各務用水）の取水口があります。川と遊水地（遊水区域）を隔てるものはありません。



左の写真は現在の千疋大橋左岸の航空写真です。

立派な堤防、道路、工場、住宅、グラウンドが見えます。この地点（千疋大橋）を安全に流れることが出来る最大の量は左図の斜線で示した部分だけです。



\* 両岸は堤防です。

\* 高さ方向は橋脚の高さです。

平成 16 年の洪水では左下の写真のように流れました。

「堤防や橋を高くすればいい」と考えられる方もみえるかもしれません。でもそうすれば対岸が浸水するのです。現状でこれを回避するには流れてくる量を減らすほかありませんね。



1921 年(大正 10 年)頃から始まる木曾川上流改修事業で河床低下(川底が低くなる)が起きてきました。「各務用水百年史」また、連年災害の復興事業による築堤、河道改修により遊水地と呼んでいた場所も冠水することがほとんど無くなりました。土地は個人所有です。基本的にどう使ってもかまいません。たとえ農地でも農業委員会の許可が下りれば転用は自由です。



一方、社会の変化により農村での経済構造に変化が生じます。農業は次第に農村経済の中心ではなくなってゆくののです。社会構造の変化に伴い土地需要も変化してゆきました。田畑よりも工場用地、商業用地、流入する従業員のための住宅用地、リクリエーション施設など。

農地だった遊水地(遊水区域)は転用され工場や住宅などがどんどん建設されます。しかし、「浸水しやすい場所」という地形的な特性を持ったまま開発は進みます。進む開発につれ、より強固な堤防が要求されます。堤防がより強固になると人々の安心感も強くなり、公立の保育園なども出来ます。お墨付きを貰ったと同然ですね。次第に遊水地であったことすら知らない住人ばかりになり、ますます開発に拍車が掛ります。こうして遊水地(遊水区域)が消えてゆくののです。「浸水しやすい場所」という地形的な特性を持ったまま。

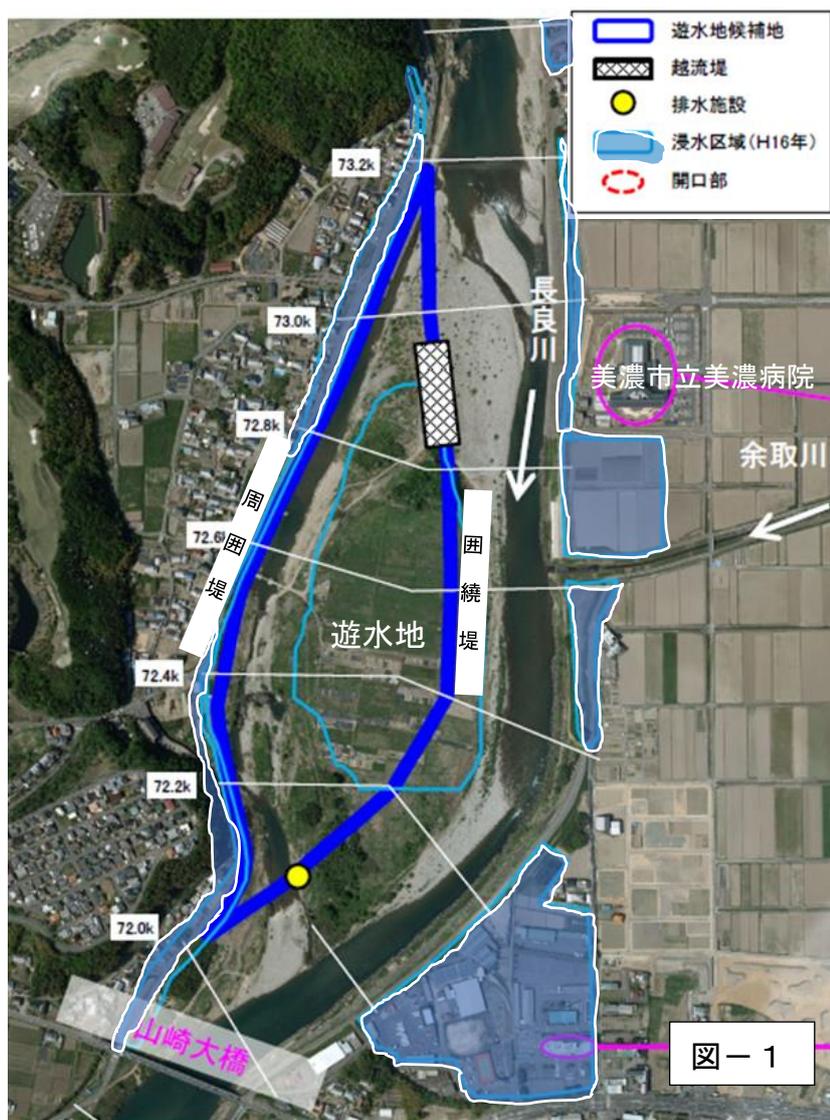
岐阜県パンフレット「伝統的防災施設」(平成 25 年 3 月)では、この地域を下のように紹介しています。



## 横越「遊水地」計画について

長良川市民学習会 武藤仁

木曾川水系河川整備計画の変更原案が昨年末に発表され、本年1月28日に意見書受付を締め切り、「計画案」の決定の段階に進みます。河川整備計画は河川法16条の2に定められた、その水系のおおむね30年間の河川整備計画です。木曾川水系では2008年に策定され今回2回目の変更となります。重要な変更が幾つもありますが、ここでは長良川的美濃市横越に計画された「遊水地」について問題を考えました。



この計画は図-1のように河道の中に建設される洪水調節池で遊水地と言えるものではありません。河道内に建設される「調節池」は、形を変えたダム施設に過ぎません。河川整備計画の基本となる木曾川水系河川整備基本方針にある「流域内の遊水機能を活かした洪水調節施設等によって河道への負担を低減させる」ものになっていません。

遊水地の整備については岐阜県の「長良川流域における総合的な治水プラン」に唱われている「当流域に存在する霞堤といった伝統的な防災施設の機能や重要性」等を踏まえ、地域の治水の歴史的経過を尊重した遊水地の位置設定・整備を、住民合意をえながら計画すべきものです。

横越「遊水地」計画は、唐突なもので、2008年に策定された「基準地点忠節において戦後最大規模の洪水にたいして約200m<sup>3</sup>/sの流量低減を見込む遊水地の整備」の帳尻あわせの計画でしかありません。

国の説明会等で、地元住民から「洪水時、河道内の遊水地が障害物にならないか」「一つの流れにまとめるのは危険ではないか」「周辺堤防は大丈夫か」等の不安の声が出るのは当然です。

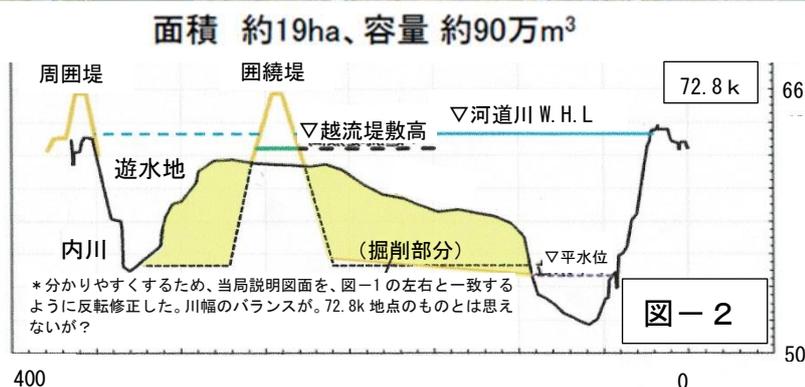


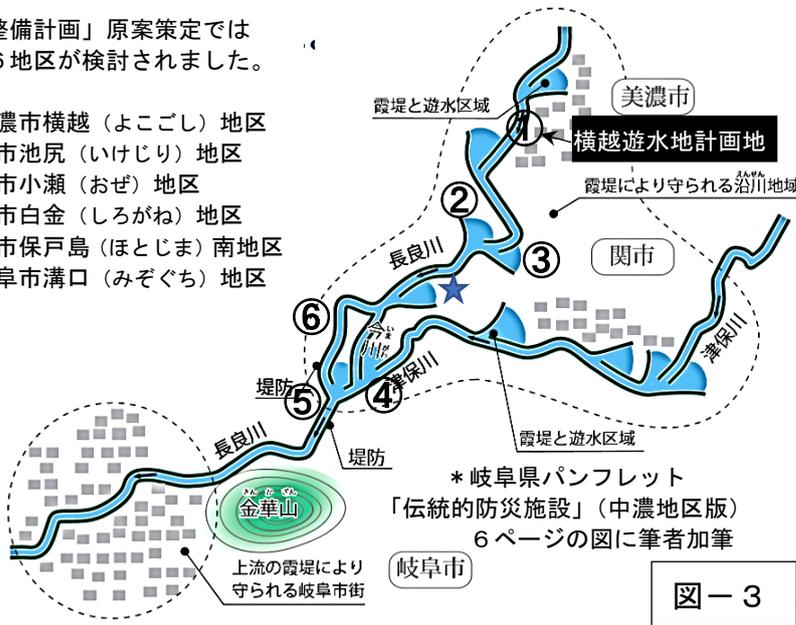
図-2のように、左岸（上流から見て左側）の堤防の高さは、建設される調節池の囲繞堤（いにようてい）や周囲堤より低い説明図になっています。図-1で白線で囲われているように平成16年洪水では越水（県の記録では溢水）し浸水しています。また、流れの一本化により左岸堤防が顕著な水衝部となります。その水衝力と対策についても全く説明がありません。この区間の左岸堤防は、現況の堤防高が計画堤防高より0.5～1.2m低く、河川整備が追いついていない状況で、河道内に巨大な構造物を造って大丈夫なのでしょうか。

また、右岸の横越地区は背面の山の手側から流下する水の排水が問題です。これまで、この地形的に閉ざされた地区の内水は、右岸堤防に設けられた排水口によって排水されていたようですが、周囲堤で仕切られることより排水不可能となりますが、その対策の説明もありません。山の上の方では、図に見えるようにゴルフ場が広がっています。集中豪雨時の排水対策は十分行われるのでしょうか。この地区も同様に平成16年洪水でも越水（県の記録では溢水）しているところです。

これらの疑問には「計画中」との回答にとどまり、基本的なところで地元住民を納得させるものになっていません。基本的合意がないもとの河川整備計画に「横越遊水地」を取り入れるのは問題です。

「河川整備計画」原案策定では以下の6地区が検討されました。

- ① 美濃市横越（よこごし）地区
- ② 関市池尻（いけじり）地区
- ③ 関市小瀬（おぜ）地区
- ④ 関市白金（しろがね）地区
- ⑤ 関市保戸島（ほとじま）南地区
- ⑥ 岐阜市溝口（みぞぐち）地区



遊水地整備の選定については、伝統的治水の歴史をもち、従来から議論されてきた地域を最優先に追求すべきです。岐阜県は中濃地区では図-3に示すように河道から溢れる扇型の11カ所の遊水区域を提示し、地元自治体と協力し地域住民への啓蒙・教育活動を行っています。

須田道康さんが報告されている地区は★で示した地区です。今回の河川整備計画で「横越」

とともに計画地に上がった「池尻」地区は、②で示した地区です。まさに「私たちが守り伝える先人の知恵「霞堤」や「輪中堤」を残し、地域を洪水から守ろう」（岐阜県パンフ）とする地域です。ところが、横越「遊水地」計画は全く違うものです。

河川整備計画では、戦後最大級の洪水（平成16年10月洪水）に対し忠節（基準点）目標流量8,100m<sup>3</sup>/sに対し河道整備で7,700m<sup>3</sup>/s、洪水調節施設で400m<sup>3</sup>/s（200m<sup>3</sup>/sを内ヶ谷ダム、残りの200m<sup>3</sup>/sを遊水地）で洪水調節しようというものです。しかし、昨年、一昨年 of 全国的な記録づくめの洪水と悲惨な大水害に遭遇して私たちが学んだことは、想定外の洪水でも「命だけは奪われない治水の原点に立ち返ること」「施設の力で洪水を封じ込めようという発想を克服する」ことではないでしょうか。平成16年洪水の忠節における最大流量実績は7,667m<sup>3</sup>/sでした。これは、既存の遊水区域や流域各所での越水・溢水による洪水の「分担」があつての記録です。今後求められることは、遊水区域の「消えゆく」状況をくい止めることや、越水しても決壊しない堤防の整備をすすめ、犠牲者を生まない治水政策の確立だと考えます。

# 命の川を売りますか？

堀 敏弘（長良川のへぼ釣り師）

昨年9月、スウェーデンの学生環境活動家グreta・トゥーンベリさん（当時16歳）がニューヨークで開かれた国連気候行動サミットで地球温暖化対策に本気で取り組んでいない大人たちに向けて怒りのスピーチをしたことが話題になった。このスピーチに対し自分に向けて言われている自覚があるのか、各国の首脳が反論やら批判、はては反論にもなっていない誹謗・中傷までコメントする始末。そして日本国内でも同じようなことが起きました。皆さんはどのように感じられたでしょうか。

このスピーチは主に温暖化対策の取り組み方に対してのものでしたが、あらためて全文を読み返してみても自身は、彼女の「あなたたちが話しているのは、お金のことと経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかり。はずかしくないんでしょうか！」の叫びに彼女の言いたいことのすべてがあるのだと思いました。

というのも以前読んだ本に出てきた「けちな親子」という江戸の小話を思い浮かべたからでした。少し長くなりますがこんなお話です。

あるところにとてもけちん坊な親子がいました。

ある日、親子が川沿いを散歩していると父親が足をすべらし川に落ちてしまいました。

息子は父親を助けようと思いましたが泳げません。息子がオロオロしていると、通りかかった男が言いました。

「百文だすなら助けてあげましょう」

でも息子はけちん坊なので、すぐに値切りました。「七十二文にまけてくれ」

しかし男は「いや百文だ」と首を振ります。

「七十三文ではどうだ」

「いや百文だ」

「では七十四文」

「だめだめ百文だ」と譲らず言い合っていると、今にもおぼれそうな父親が川の中から息子に「それ以上は絶対出さな、俺は死んでもいいから」と言った。

どうです？このお話って、今の世界の状況をみると、ただのけちん坊の笑い話だけでは済ますことができないのではないですか。グretaさんの言っていることと同じではありませんか。ただこの父親は自分の命ですが、彼女の「命より金か！」は現在の子ども達世代以降すべての命が対象です。この小話をあらためて調べてみると、あるホームページでは4年生向けのお話となっています。各国の首脳向けの小話ではありません。これが江戸の小話に出てくるのです。文明は発達しても人間はまったく発達していないことの証明なのではないでしょうか。

こんなことを考えていたら、2010年の愛知CPO10から10年ということで「あいち・なごや生物多様性EXPO」が1月11日・12日に開催されたので行ってきました。イベントホールに展示されていたブースを回ると川、海、里、森、動物の様々な分野でたくさんの生物が危機にさらされ、その多様性を守る運動が取り組まれているのがわかった。もちろんその中には長良川の危機についての展示もありました。

そしてこの生物多様性EXPOに参加して、グretaさんのスピーチやこの小話を念頭にあらためて長良川と生物多様性について考えてみた。

1500億円という公共事業がやりたくて造った長良川河口堰。運用され始めてから今年で25年。この間水は余り続け、無理やり使って15%のみ。河口堰は大水の時役に立つと言われているが実際には水門は障害物でしかなく大水の時は全面開放している。この構造物は海と川をつなぐ河口に造られ、川の首根っこを絞めることで汽水域をなくし、魚たちが海と川を行き来することができなくなり死んでいく長良川へと変化させた。

長良川はすでに 25 年以上前からお金に翻弄され殺されかけている川の象徴なのである。

こう指摘すると国は利水を持ち出し、この異常気象の時代、いつか水が必要になるかもしれないと言う。しかし長良川はいつかではなく想定していた通り、確実に死に向かっているのです。ヤマトシジミは長良川で漁ができなくなるほど減り、天然湖上アユやサツキマスは激減。何とか人の手で稚魚が海への降下するのを手伝ったり稚魚放流したりして維持するのが精いっぱい。それでもこれらの魚は長良川の目玉商品であり経済的な資源となるのでなんとか維持されている。しかし海と川とを行き来する回遊魚は他にもウナギ、シマヨシノボリ、ウキゴリ、カジカ、アユカケ、モクスガニなど多くの種類がいる。これらの生物は確実に減っていくことになる。また逆に河口堰上流は池状態になりブラックバスが密放流され増えて、いまではボートまで出しての有名なバス釣り場となってしまっている。

こうした中、2015 年には「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定された。長良川沿いには「清流長良川の鮎」の旗が立ち並び大々的に宣伝。長良川システムが世界農業遺産に認定されたことで県も鮎の生産量を日本一にすると魚苗センターを拡充するなど鼻息があらう。しかし長良川の現状はどうだ。その後長良川の支流である亀尾島川の美しい渓谷に治水効果がほとんど期待できないダムを 580 億円かけて建設中である。

そして今まさに国土強靱化の名のもと、河川改修工事のオンパレード。水を早く流すためには河原や河床はできるだけ平らにしなければと下流から上流まで工事が進められている。平坦な川にしてみれば、3 面張りの用水路に魚たちがいなくなってしまうように、長良川で一生生活する魚たちが再生産されていく場所も無くなり、ついには消えて行く運命になる魚も出てくる。しかし岐阜県は利益の出る鮎がいれば良いとばかりにこうしたことにまったくと言っていいほど無関心であるだけでなく、挙句の果てには、使い道に困った徳山ダムの水を、890 億円かけてトンネルを掘り導水路で鶴飼会場のすぐ上流に流そうとまで計画している国に早く計画を進めてくれと言う始末。

世界農業遺産に認定された長良川に他の河川、ましてやダムの溜まり水を流すという愚行。ここにも公共事業から利益を出したい力が働いている。経済は人々の生活にとって重要な要素であり、鮎の生産量日本一を目指すのは良いとしても「鮎さえいれば長良川



だ！」かのようにふるまうのは長良川をお金でしか見ていないということではないか。岐阜県が作ったパンフレットには国連食糧農業機関の 5 つの認定基準の 2 つ目に生物多様性と生態系機能が必要と明示されている。このままで行けば遠からずこの認定基準が維持できなくなり認定取り消しということになりかねない。

グレッタさんではないけれど、もう長良川からお金を絞り取ることをだけを考えるのはやめなければいけないのではないか。昨年おきた河川工事に関わる汚職事件は、長良川で生活させてもらってきた人々の多くが長良川をお金の面からだけしか見てこなかったことが原因の根底にあるような気がしている。

岐阜県が言うように長良川は県民にとって命のように大切な宝物なのです。経済的、文化的、生物的側面だけでなく精神的な面からも大切なものだと思う。そんな大切なものを目の前の利益だけを考えた事業に売りますか？確かに治水は大切ですが、人々の生命の安全と「生物多様性と生態系機能の維持」は決して対立するものでなく両立させなければいけない。そこを大切にしていかないとグレッタさんの人類存続の危機の叫びが杞憂だったとしても、何世代か後の子ども達は長良川を「長良川用水路」と呼ぶことになってしまうかもしれない。

## 事務局から

■ 先日、川漁師の平工さんとお話をする機会がありました。その時に「観光列車 ながら」に乗った時の写真を一緒に見て下さって久しぶりにお話が出来ました。長良川の上流は美しく心が和みます。そこでは郡上で捕れた川魚の料理を頂くことも出来て、平工さんも珍しさに驚いていらっしゃいました。年々台風が大きくなり災害を思い浮かべますが、先日の講演会で聞いた「自然こそ最高のエンジニア」というオランダの活動家の言葉を思い浮かべます。小さくとも行動することの大切さを学びました。(中川敦詞)

■ 昨年は俳句を少し齧りました。先が短いので今年は短歌を学ぼうと佐々木幸綱が李白の飲酒の詩に材をとった歌を読んでいるとなんと興味が漢詩に移りました。倭が世界の歴史に最初に登場する卑弥呼の時代より少し後の陶淵明と孔子が編纂した世界最古の詩篇「詩経」の世界を彷徨っています。この戦乱と長き荒廃の時代の詩は暗くあきらめが濃く漂います。憲法に守られて戦争の無い日本ですが閉塞感は実によく似ています。社会を分断し敵を作り攻撃して自分の立場を保つトランプと晋三の政治は現代の民主主義にはそぐいません。なにより彼らを放置すれば地球が壊れます。オリンピック後の景気対策は環境破壊には目もくれずやるでしょう。今世界では感性強き少女が勇敢に声をあげています。若い世代の声は一筋の光明ですが此処まで来てしまった為政者の責任は重大です。今年は自然破壊を食い止める節目の年となるでしょう。粘り強くあきらめず押し戻しましょう。(粕谷豊樹)

■ 「従来から遊水機能を有する地域については…その機能の積極的な保全に努め、将来的な遊水地としての整備も視野に入れる」 今、国交省が3月にも手続きを終えてしまおうと急いでいる木曾川水系河川整備計画の変更部分の一節である。一般論でいえば考え方の方向性は悪くない。しかし、今回の「変更」で位置づけられようとしている「横越」の遊水地は、河道内に人口構造物を作る、という常識外のものである。その暮らす住民が享受してきた川の恵みを奪い、水害の危険をより増大させてしまうものである。2008年策定の木曾川水系河川整備計画では、具体的な場所に言及しないまま「約200 m<sup>3</sup>/sの流量制限を見込む遊水地等を整備する」と記載した。「概ね30年」の整備期間が半分近くになったので、計画上の辻褃合わせの都合で、急ぎ「遊水地」の場所を決めようとしているようだ。「立ち止まれ」「川の歴史をきちんと見直せ」「住民の声を聞け」と言いたい。(近藤ゆり子)

■ 平成は多くの自然災害に苦しめられた、苦難の時代だったと思います。阪神・淡路大震災、そして平成23年の東日本大震災、その他多くの地震や台風、集中豪雨などの頻発があちこちに傷跡を残しました。特に福島原発事故は、いまだに復興の兆しもはかばかしくなく、厳しい状況のまま、そして、安倍総理のもとでの、数々の疑惑は人として信じられない対応で疑念は闇に葬られ、令和に入っても、「桜を見る会」の政治スキャンダルが恥ずかしげもなく繰り返されています。その元凶の安倍さんが総理でい続けられることが不思議でなりません。あきらめてはいけませんね。皆さん怒りましょう！！

微力でも、無力ではない！も少し頑張って、おかしいことはおかしい！と声を上げ続けたいと強く思うこの頃です。(岡 久米子)

■ 春を告げるシラウオ漁を見に桑名の赤須賀漁港へ行ってきました。シラウオは体長8cmくらいの透明な美しい魚で、芭蕉をはじめ多くの人によって詠われています。この時期産卵のため汽水域の河口にやってくるそうです。漁期は1月6日から。2隻の船で網を引く船引き網漁です。日の出とともに出漁した船は木曾三川の河口あたりで漁をして昼頃帰港。1時きっかりに競りが始まります。この日は5船団が獲ったシラウオの入った大きなカゴ5、6個が競り台にのりました。日によって漁獲量も変わり、競り値も変動するようです。このところヤマトシジミだけでなく人工干潟でのハマグリも不漁で、出漁日だけでなく1日あたりの漁獲量も前より厳しく制限しているそうです。ノリの出来も心配とのこと。  
鈍く光る河口堰を眺めながら、漁師さんたちの厳しい状況を聞きました。 (田中万寿)

明けぼのや しら魚白き 事一寸

桑名の浜辺にて 松尾芭蕉

鮎も 鱒も 蜆・蛤・白魚も 美しく生きよ 生きものなれば

久徳高文 河口堰建設差止訴訟原告

## お願いとお知らせ

### ◆ 改訂版「よみがえれ長良川」リーフレット（4つ折り）を作成しました

外観はあまり変わっていませんが、内容は最新の情報が入っています。同封しましたので、ぜひお読みくださり、周りの方々に広めてください。



### ◆ 2月29日にシンポジウムを開催します

一よみがえれ長良川2020 変わりゆく長良川の魚と生物多様性—



今回は長良川の生き物たち、とりわけ魚たちについて、長年調査

研究をされて「岐阜県の魚類」をまとめられた向井貴彦さん、親子三代にわたり長良川の漁業に携わってこられた漁師の大橋修さん、長良川をこよなく愛する釣り人の堀さんから、かつての長良川、現在の長良川、について語っていただき、参加者とともにこれからの長良川について考えていきたいと思います。

お知り合いの方にも声をかけていただき、ぜひご参加ください。リーフレットとシンポジウムのチラシを同封いたします。もっと配っていたらよかったらお知らせください。至急お送りいた

します。

### ◆ 5月10日に長良川下流域環境観察会を開催します

2010年以來、千藤克彦先生たちの案内で毎年行ってきました。船に乗って河口堰周辺の川底、葦原などの状況を、揖斐川、木曾川と比較しながら観察します。ご参加をお待ちしています。ファミリー参加大歓迎です。





## 参加団体紹介 8

「よみがえれ長良川」実行委員会の参加 29 団体を紹介しています。第 8 回は、野菜の共同購入と自然食品の店を営まれる「ゾンネガルテン」さんです。

### ゾンネガルテン

代表 長瀬 敬



「生産者と直につながり、畑へ野菜を集荷し、その日にお届けする、無農薬・無化学肥料の野菜の共同購入(旬の野菜セット)」、「食品から生活雑貨まで、暮らしに必要なものが一通り揃う自然食品の店」。現在この 2 つの柱で、名古屋市名東区に店を構え「ゾンネガルテン」を営んでいます。店名の由来はドイツ語で太陽(sonne)と庭(garten)からきています。

1976 年「ポランの広場」という子供の絵本屋に始まり、教育、社会、環境問題を問う「本屋らしくない本屋」としてワークショップ・講演会等の活動。その後 1989 年より「野菜の共同購入」を始めます。また消費だけではなく生産に関わるという想いから、国産小麦 100%の天然酵母のパンを生産販売。その後カフェ「ポランの広場」を併設。元の絵本屋で 3 つの活動をするには手狭となり、1999 年、自然食品の店「ゾンネガルテン」をオープン。昨年はお支えいただいた皆様のおかげで 20 周年を迎えることができました。

お互いの事情がよくわかるように身近な方々との直取引を中心に、等身大であることを大切にやっています。野菜は長野県阿智村や知多半島などへ直接伺い、顔が合わせられる生産者からいただいています。食べる、暮らすという当たりまえのことが小さなつながりで循環していけるよう、社会を考える素材にもなり得る野菜を、楽しく手をかけて食べることから、自分たちの暮らす環境をお互いに考えていく、そんな集まりでありたいと思っています。



愛知県名古屋市名東区一社 2-162 ☎052-703-4469 [https://peraichi.com/landing\\_pages/view/sonnegarten](https://peraichi.com/landing_pages/view/sonnegarten)

ご参加  
ください!

2月17日(月) 第二次設楽ダム裁判口頭弁論 名古屋地裁前集合 13:30

2月29日(土) シンポジウム「よみがえれ長良川 2020」

13:30~岐阜大学サテライトキャンパス 4F 大義室

3月1日(木) 水道民営化反対リレーシンポ 13:30~愛知労働会館

3月15日(日) さよなら原発ぎふパレード 10:30~清水緑地公園(JR岐阜駅南)

4月23日(木) 第二次設楽ダム裁判口頭弁論 名古屋地裁前集合 13:30

5月9日(土) 設楽ダム報告&シンポジウム 13:30~豊橋市市民文化会館

5月10日(日) 長良川下流域環境観察会 10:00~15:00 桑名住吉神社北駐車場集合

5月15日(金) 設楽ダム見学会と交流・懇親会 13:30 設楽町役場駐車場集合

7月6日(月) 第二次設楽ダム裁判口頭弁論 名古屋地裁前集合 13:30

## 発行：長良川市民学習会 <http://dousui.org/>

代表: 粕谷志郎

連絡先: 武藤 仁 / 090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1



私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。賛同して下さる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会

本ニュースのバックナンバーは <http://dousui.org/news/index.html> でご覧になれます。